

任国あんなこと！こんなこと！ その2

●スリ・ランカの中古車と交通事情 (安延義弘会員)

1996年6月、スリ・ランカに派遣された時の事である。無事、首都コロンボに到着した翌日、60kmばかり離れたプロジェクト・サイトに向かう車の中から、物珍しそうに沿道の風景を眺めていたら、セブン・イレブンの運搬車が目に止まった。案内のスタッフに「スリ・ランカにもセブン・イレブンがいるんですね。」と声をかけたら、「いや、あれは車だけです。」との回答。変だなと思いつつ、それからプロジェクト・サイトの行き帰りに注意して見ていたら、なんと、コロンボ周辺を走っている車の8割方は中古車で、その殆どが日本製であった。

これらの車が堂々と走れるのも、スリ・ランカには車検制度がないので、走りさえすれば、車体が凸凹であろうが、ランプが点かなかろうが、お構いなしである。

一応、交通規則はあり、たまに制限速度の表示が出ているが、おんぼろバス、トラックから中古車にいたるまで、70、80km/hのスピードで突っ走ってくるので、狭い道での対面通行は命がけである。特に、見通しがよいと2車線の簡易舗装の道でも、すぐにスピードを出す。私が使っていたドライバーも例外でなかった。そんな訳で、日本では禁止されている内側追い越しは日常茶飯事で危険この上もない。そこでドライバーには内側追い越し禁止、スピードは60km/h以下と言いつつ、守られるのは一週間程度。だから、スピードを押さえろ、内側から追い越すなど注意するのが、口癖ようになっていた。通常は、大部分の車が前の車を追い越そうと右のウィンカーを点けばなして走るので、後続の車は右折するのかしないのかわからないから、追突す前はしゅっちゅうである。そこで、本当に右折したい時は運転手が窓から手を出して合図し、追い越しても良い時も駄目な時も手で合図し、これが暗黙の交通ルールようになっていた。

●ウガンダ、アフリカの観光 (安食和博会員)

ウガンダは赤道上のアフリカ大陸のほぼ中心に位置し、標高1200メートルの首都カンパラは1年中温暖で季節変化がなく、大変過ごし易い所である。農業生産力も高くお茶の収穫などは年に最高36回も取れるくらいに日差しが強く、雨が多い。そして緑に覆われた国土は、アフリカの真珠と言われるほどである。美しい自然に恵まれたこの国は観光として、西のコンゴの国境には有名なマウンテンゴリラの生息地があり、地帯の溝にできたアルバート湖、アフリカ最大の湖であるビクトリア湖、そこを源流とするナイル川など観光資源は豊富なのであるが、ゲリラ等により主要な観光地は立ち入ることができない状態にある。そこでウガンダに在住する人や日本から来る若い観光客は、安全な東部地域などのウガンダ人の儀式を見に行くことがはやっている。

その儀式は割礼である。12から13歳の男の子が6月ごろ村の広場で性器の皮を皆の前で切り取られるのであるが、村最大のイベントとして親戚一同、都会に移り住んだ者も戻ってきて参加する。大人への通過儀礼として重要なことであるが、村全体が興奮のつぼとなり、静かな村が大騒ぎとなる。切られる男の子たちは何日も寝ずに、この儀式のために、切られる恐怖心を超えるために、気持ちを集中し皆ハイの状態に陥っている。もし切られてから泣いたり痛がったりでもしたら、その子は一生弱虫の汚名を背負って生きなければならぬため必死である。ほとんどの切られた子供たちは、嬉々として血の出ている先端を皆に示し、飛び回るのである。それを大騒ぎして村人が見るのであるが、その中に日本人の若い女の子が参加してその興奮を味わっている。

アフリカの観光とはこういうものなのかもしれない。

●知っていますかドミニカ連邦国 (植岡龍太郎会員)

アメリカのフロリダ半島沖から南米のベネズエラ沖に至る東カリブ諸島のなかに、「ドミニカ」の名が付く島国が2つあることを知っていますか？北緯19度の同じ島の中でハイチと国境を接し、スペイン語を話し、日本人移民や広島カープの野球教室で有名な「ドミニカ共和国」と、それから約700キロ南に離れ北緯15度にあつてクレオール語や英語を話し、乗用車輸入以外には日本と交流の少ない「ドミニカ連邦国」です。

佐渡島より若干小さい「連邦国」の人口は7万人強と、192ある国連加盟国の中で少ない方から9番目です。同国は1978年の独立後も英連邦内にあるものの、生活文化面では歴史的にも両隣のフランス海外県島を通じてクレオール文化の影響を強く受けています。

火山隆起による険しい地形の同島は、発見者のコロンブスが今来ても見間違わないと云われるほど開発が遅れた緑一色の山岳農業国です。花や野菜、根菜類、果物を周辺国に輸出し、食糧や日用品の殆どを輸入します。世界自然遺産の亜熱帯雨林が唯一の観光資源です。サンゴ礁はなく、狭い浜は黒砂か小石浜です。大型機発着用の飛行場造成用地がないため、観光客の多くは5～8万トンのカリブ周遊船で来て森林浴を楽しみます。誕生時に戸籍制度がなかったため世界一高齢者としてギネスブックへの登録が遅れている126歳の老女を初め、100歳以上の高齢者23人が健在であるなど長寿社会です。毎年襲来するハリケーンでバナナ生産量が大きく変動し、約200億円の国家予算も度々前年比半減します。地域通貨東カリブドルが米ドルに固定しているため、一人当たりGDPはUS\$3,600と高く、一般無償資金協力の対象外ですが、政府と国民は共に貧乏です。

●タンザニア (安部信幸会員)

インド洋に面した経済首都ダル・エス・サラームからインド洋沿い南へ300km余にキルワ・マンゴという小さな町がある。19世紀には奴隷貿易で発展した東アフリカ最大の都市国家が栄えていたという。現在はリンディ州キルワ県の県庁所在地である。雨季には横断する河川が氾濫して陸上交通が途絶え、民間会社の不定期便が唯一の交通手段となる。筆者もこの時期に足止めされ、次第に町中の燃料、電気(火力発電の燃料不足による)、電話(電力不足のため)、食料、水が欠乏したが、外部との連絡は警察無線だけとなり、一週間後にJICAの救援機で救出された経験がある。

マンゴの沖合い2kmにキルワ・キシワニ島がある。1981年ユネスコの世界遺産に指定された世界最後の未開の巨大な王宮や砦など大遺跡がある島であるが、あまり世に知られていない。1331年にこの地を訪れたアラブ人のIbn Battoutaは「この町は世界の中でも最も美しく、計画だって整えられた都市の一つである」と三大洲周遊記に書き残している。かつてキルワは内陸よりザンベジ川の地域を通して奴隷、金、象牙、銅、鉄、ココナツなどを集め、インドやアラブに運ぶ貿易拠点として繁栄した。逆に東洋の文物、中国の磁器も多く持ち込まれたと見られ遺跡から発掘されている。キルワ・キシワニ島はまだまだ未開であり、観光開発が待たれるところである

.....原稿を募集しています.....

会報第3号(H16年3月発行予定)に掲載する原稿【任国あんなこと！こんなこと！】を募集します。 ※400～500字程度

JICA帰国専門家連絡会かながわ会報 第2号

発行 2003年4月
 発行者 JICA帰国専門家連絡会かながわ (JECK)
 事務局 谷保 茂樹 (e-mail: Staniho@aol.com)
 横浜市青葉区青葉台1-3-9
 株式会社ティーエーネットワーキング内

編集委員会 中之蘭賢治 (代表幹事) (e-mail: zvs04325@nifty.ne.jp)
 佐藤満寿哉、鈴木千明、物部宏之、谷保茂樹
 印刷 株式会社 横浜リテラ (URL: http://www.yokohamalitera.com/)
 (e-mail: litera@crocus.con.ne.jp)
 横浜市戸塚区上矢部町2039-2